

# いのち 生命のいきわいとつながり

生物多様性ちば ニュースレター No.10 平成20年 10月1日

## シャープゲンゴロウモドキの 絶滅が意味すること

倉西良一：千葉県立中央博物館

### 千葉県のシャープゲンゴロウモドキの位置づけ

絶滅の危機に立たされた昆虫がいます。シャープゲンゴロウモドキ。環境省のレッドリストでも絶滅危惧Ⅰ類とされています。和名のシャープという名は、家電メーカーとはなんの関係もありません。このゲンゴロウを世に公表した研究者が学名に英国の昆虫学者シャープさんの名前をつけたことによります。ちなみにシャープさんは、日本のゲンゴロウなど水生甲虫の研究の草分けでもあります。モドキという名前がついていますが、シャープゲンゴロウモドキは、ゲンゴロウ科に属するゲンゴロウの仲間です。

シャープゲンゴロウモドキには、大きく分けて2つの個体群があります。関東に分布する個体群と中部から西日本に分布する個体群です。これらの個体群間には、雌の上翅に形態的な違いが知られています。今後、遺伝子等を比較すると両個体群の間に質的な大きな違いが見つかる可能性が高いと考えています。

西日本型の個体群は石川県以外ではほぼ絶滅し、石川県でも絶滅の危機に瀕しています。一方、関東の個体群は、戦前、東京都や神奈川県、千葉県では北総地

域にも生息していました。これらの地域ではすでに絶滅が確認されています。房総半島では、1937年の成東町の記録が最後で、その後記録がないため絶滅した昆虫と考えられていました。ところが1984年に富津市の山間部に生息していることが明らかとなりました。この再発見はいまや伝説となって語り継がれています。その後、房総丘陵の中山間地に生息地がいくつか見つかったものの、生息環境の改変や採集圧（乱獲）でいずれの地域もほぼ絶滅という現状です。シャープゲンゴロウモドキの関東個体群が残存するのは、千葉県の中山間地のほんの一角だけであり、もし千葉県の個体群が絶滅してしまうと、シャープゲンゴロウモドキの関東個体群が地球上から消えることを意味します。

### 絶滅の危機に至った原因は？

#### <その1 生育環境の劣化>

最も大きな原因の一つが生息環境の改変です。シャープゲンゴロウモドキは、河川の氾濫原、谷津田の中の湿田や水たまり、ため池に生息しています。環境に対する要求は高く、湧水の存在など、さまざまな条件のととのった場所にしか生息できません。湿地に生息するシャープゲンゴロウモドキにとって一番困るのは、生息地やその周辺が乾燥することです。休耕田の増加や圃場整備などは、大きな打撃になっています。シャープゲンゴロウモドキは、除草剤などの農薬にも大変弱いので、裏をかえせばシャープゲンゴロウモド



シャープゲンゴロウモドキの成虫（雄）



シャープゲンゴロウモドキの生息地

キが生息していた場所では、これまで手間暇をかけた伝統的な農業が営まれてきたことがうかがえます。そのような農業をしてくれた営農者の方々にシャープゲンゴロウモドキに代わってお礼を言わなくてはなりません。休耕田は各地で増加の一途をたどっています。この背景には農業人口の高齢化や小規模農業の切り捨てなど社会的な問題が大きく横たわっています。これらの社会問題を解きほぐす努力なしに事態の抜本的な好転は望めないと考えています。

### <その2 外来種アメリカザリガニ>

追い打ちをかけるように、外来種アメリカザリガニやブラックバスによる攻撃（捕食）です。シャープゲンゴロウモドキは成虫になると硬く、逃げるができますが、体が柔らかい幼虫は、アメリカザリガニの絶好の標的。捕まるとたちまちばらばらにされ、食べられてしまいます。特に、アメリカザリガニは、シャープゲンゴロウモドキが産卵する植物や餌となる小動物を食べ尽くしてしまうので、シャープゲンゴロウモドキは生息できなくなります。シャープゲンゴロウモドキとアメリカザリガニは、捕食者という生態的な位置や、活動空間がきわめて似ているため共存できないのです。房総の休耕田やその周辺にある溜池をまわると、山の中でもアメリカザリガニが侵入していることが多いのですが、そのような場所にはシャープゲンゴロウモドキは生息していません。アメリカザリガニはその魔の手を伸ばし、最後といってもよい生息地でも猛威をふるうようになってしまいました。シャープゲンゴロウモドキ以外の水生動物も激減しています。これはとても悲しいことです。

### <その3 採集圧>

だめ押しとなりそうなのが、極めて大きな採集圧です。ペットとして飼育をするために集中的に採集されてしまうのです。インターネットの普及も採集圧に拍車をかけており、検索すると売りに出されているのが分かります。調査用に標識された個体でさえ、売られそうになったことがあります。しかも、決して安い金額ではありません。最近特に加熱傾向にあるようです。レッドリストでランクが上がると値段も上がるのはとても皮肉なことです。休日には深夜でさえ採集者が保全区に立ち入ることが目撃されています。この採集圧は非常に大きな脅威です。石川県のように法的に採集が制限されると、商取引が出来なくなるため、少しは沈静化するのではないかと考えています。

### シャープゲンゴロウモドキの現状は？

シャープゲンゴロウモドキの生息地の耕起、草刈り、アメリカザリガニの駆除といったNPOの方々の懸命な努力とは裏腹に、明るい材料はほとんど見あたりません。その要因の一つに『そんなゲンゴロウ、ど

うなってもかまわない』という冷やかな視線が見えてくる気がしています。確かにゲンゴロウの一種がなくなっても困る人はほとんどいないと思います。悲しい気持ちになる人も少ないかもしれませんが。しかしシャープゲンゴロウモドキは里山の象徴としての側面をもっているのです。シャープゲンゴロウモドキが生息する里山は、日本人が長年培ってきた、人と多くの生き物が営みを共にする環境そのものです。私たちは今、そのような環境に何の価値も見出せず、経済的に意味がないからと捨ててしまおうとしているのです。私にはシャープゲンゴロウモドキがその存在をもって私たちに警鐘をならしてくれているような気がしてなりません。

草稿を読んで意見を下さった千葉シャープゲンゴロウモドキ保全研究会の西原昇吾さんに深くお礼申し上げます。



シャープゲンゴロウモドキの幼虫。  
オタマジャクシなどの生きた小動物を捕らえて食べます。

## 小さな湿地に思うこと

吉田明彦：生物多様性センター

### 芝山湿地

自然はなにも広い原生林や、ゾウやシマウマが行き交うサバンナばかりではありません。皆さんの身近なところにも、自然を感じることでできる場所があるのではないのでしょうか。

東京のベッドタウンとして開発が進んだ船橋市内の住宅地の一角に、芝山湿地と呼ばれる面積600㎡ぐらいの小さな湿地があります。ここは希少種のニホンアカガエル他にもサワガニ、オニヤンマのヤゴ、メダカなど、都会では目にする事の少なくなった生き物たちを観察できる貴重な場所です。また、東側の斜面林から流れ出す清らかな湧き水は、多くの生き物たちの命の源となっており、芝山湿地と一体となって豊かな生態系を築き上げています。



## 芝山湿地の生い立ち

しかし、こうした素晴らしい環境が住宅街の中で自然と残った訳ではありません。実は芝山湿地は県立船橋芝山高等学校の敷地の中にあります。学校の敷地内で放置されていたヨシ原と湧水を10年ほど前から生徒と職員でピオトープとして整備し、水の流れを確保するための雨水タンクの設置や外来植物の駆除、観察用の木道の整備などの多くの工夫と苦労があって現在の環境が保たれているのです。

また、芝山湿地の成り立ちには、地元の人たちの活動も大変重要な役割を果たしています。以前湿地の東側の斜面林にマンションの建設計画が持ち上がったことがありました。そのとき、地域の人たちが少なくなった自然を守るため計画に反対した結果、計画は中止となり、斜面林の木々と湧き水が現在に引き継がれたのです。

## 地域の中で

このピオトープは学校での生物や地学の授業で活用されているだけでなく、地域の人と一緒に観察会やホタルの鑑賞会を行うことで、人と人とを結ぶ場としての役割も担いつつあります。

周辺の人たちや老人福祉施設のお年寄りの方々と一緒に開かれた「ホタル鑑賞の夕べ」では、乱舞する姿に見入る人、手のひらに乗せる人など、思い思いにホタルを楽しみ、「子ども時代の風景を思い出した。懐かしい。」「こんな近くでホタルを見られると思わなかった。」といった声も聞かれました。



地元の「クスノキ会」の方々が芝山湿地の見学に訪れました。  
撮影者：佐野郷美

## 身近な自然を大事にしよう

このように、都市部に残された自然環境には、人と人とを結ぶ架け橋となる可能性があります。例えば、見知らぬ人同士が町なかの路上ですれ違っても互いに挨拶はしないかもしれませんが、自然の中の遊歩道であれば自然と挨拶を交わすのではないのでしょうか。自然には、人と人之間にある壁を低くする作用があるのだと思います。地域コミュニティが希薄になったといわれている都市部における「残された自然」の意味を、こうした観点からもよく考えていかなければなりません。

日々すこしずつ違った緑を見せる木々、そよ風が運ぶ水辺の匂い、澄んだ夜空の下で聞く秋の虫たちの声。こうした自然の織りなす風景は心を和らげ、素直な気持ちにさせてくれます。自然を経済的に評価する

## 地域文化と動植物 ② さつまいも



北総のサツマイモ畑(成田市提供)

秋の味覚と聞いて焼き芋を思い浮かべる人は多いのではないのでしょうか。千葉県は全国的なサツマイモの産地で、平成一八年の産出額は鹿児島県に次いで第二位です。主に香取地域で栽培され、昼夜の適度な温度差と北総台地の水はけがよい土壌はサツマイモ栽培によく適しており、他の産地に比べ品質が一定で味が良いといわれています。

実は千葉県とサツマイモとは深い関係があります。将軍吉宗の時代に幕府主導で飢饉対策として、サツマイモ栽培が全国に広がりましたが、そのときの責任者が青木昆陽です。昆陽は小石川の菓草園の他、下総の馬加村(現千葉市花見川区幕張)、上総の不動堂村(現九十九里町不動堂)を試作地を選び、享保二十年(一七三五年)に試作は成功しました。県内の二カ所の試作地は、千葉県指定史跡となっています。また、馬加村ではサツマイモのおかげで後の飢饉でも死者がなかったことから、昆陽の遺徳を讃え弘化三年(一八四六年)に昆陽神社を建立し「芋神様」として祀っています。

幕張の他にも、その地にサツマイモを広めた人を今でも大切に祀っている地域が各地にあります。沖縄の「芋大王(ナムウスー)」、薩摩の「甘藷翁(からいもおんじょ)」、瀬戸内海の「芋地蔵」、岩見の「芋代官」などです。全国にサツマイモが広まる以前に、裁かれるのを覚悟で藩外への持ち出し禁止のサツマイモを貧しい故郷のために持ち帰った人々です。

普段何気なく食べているサツマイモですが、そこにも様々なドラマが隠されています。

(忠田秀彦・生物多様性センター)



幕張の昆陽神社

ことも重要ですが、それだけでなく自然の人に対する優しい働きにも私たちは目を向けて、大切にしていきたいものです。

## 実行委員新規募集のご案内 ちば生物多様性県民会議実行委員会

**ちば生物多様性県民会議から実行委員会の新規案内がありましたので、次のとおりお知らせします。**

ちば生物多様性県民会議は、「生物多様性ちば県戦略」の策定後も、戦略の実行、実施段階での事業評価、見直し等に参加していくことを目的に活動を継続していきますが、平成20年9月1日に改正された新規約に基づき、来年1月1日から新体制でスタートするために、新たに実行委員を募集いたします。

### 資格

趣旨に賛同する団体が選出した代表者、及び実行委員会の運営に積極的な個人の誰もが登録できます。ただし、団体の代表者は1名とします。

### 実行委員の主な責務

実行委員は規約に基づき、県民会議の運営について

検討し、議決するとともに、相互に連携して生物多様性の概念及び保全・再生・活用の広報・啓発に努め、それらを推進するための活動を支援しますが、規約には次の責務を持つことなどが明記されています。

- 県民会議代表が招集する年3回の定例会及び臨時会への参加(団体代表の実行委員は、同じ団体内の代理出席が可能です)
- 県民会議の運営に必要な事項の検討、提案、議決
- 実行委員会メーリングリストへの登録及び参加
- 役員相互選
- 必要に応じた部会の設置及び運営

**登録期間** 平成20年9月26日～同年10月25日

### 登録方法と問い合わせ先

自然保護課のホームページ掲載の所定の書式により、事務局あてにメールまたはFAXでお申し込みください。登録完了後、事務局から確認の連絡をいたします。

事務局：「ちば生物多様性県民会議事務局」  
(千葉県環境生活部自然保護課内)  
TEL：043-223-2957 FAX：043-225-1630  
E-mail：hogo10@mz.pref.chiba.lg.jp  
所定様式掲載ページ：  
[http://www.pref.chiba.lg.jp/syozoku/e\\_shizen/tayosei/kenmin/bosyu.html](http://www.pref.chiba.lg.jp/syozoku/e_shizen/tayosei/kenmin/bosyu.html)

千葉県の希少種 (千葉県レッドデータブックから)

写真：ヒメボタルの雄  
二〇〇四年六月 鴨川市内浦山  
県民の森 倉西良一撮影



③ ヒメボタル  
(ホタル科)  
〈最重要保護生物〉

ヒメボタルは、美しい光を放つ体長7ミリほどの小さなホタルです。幼虫は陸上でキセルガイなどのカタツムリの仲間を食べて成長します。2004年6月、約半世紀ぶりに房総半島での存在が明らかになりました。分布は、鴨川市の内浦山県民の森とその周辺の山塊に局限されています。生息地が林道沿いであったため、車両などの人工的な光が生息に大きな影響を及ぼすことが懸念されました。県民の森では成虫の活動する6月には観察会を行うとともに、夜間の車両の通行を制限するなどの保全対策を行っています。(倉西良一：千葉県立中央博物館)

## 学校ビオトープフォーラムを開催します。

学校ビオトープの整備・活用の事例や生態園における維持管理の方法などから、学校ビオトープの方向性を探る「学校ビオトープフォーラム」を開催します。

**日時**：平成20年11月8日(土) 10:00～16:00

**場所**：県立中央博物館

**内容**：中央博物館の生態園観察会  
学校ビオトープの整備・活用の事例発表  
パネルディスカッションなど

**定員**：200名(当日先着順：参加費無料)

**問い合わせ先**：生物多様性センター  
電話 043-265-3601

発行

編集

千葉県環境生活部自然保護課 生物多様性戦略推進室 生物多様性センター(担当：忠田)  
〒260-0852 千葉市中央区青葉町955-2(千葉県立中央博物館内)  
TEL 043(265)3601 FAX 043(265)3615  
URL：<http://www.bdcchiba.jp/index.html>